

宇野千代全集

第五卷

宇野千代全集 第五卷

昭和五十二年七月十日印刷

昭和五十一年七月二十日発行

著 者 宇野千代

発行者 高梨 茂

印刷者 山元正宜

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六一)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九七七

小説
五

目次

人形師天狗屋久吉

日露の戦聞書

おはん

行く

この白粉入れ

あとがき

書誌

5

57

125

217

225

277

278

人形師天狗屋久吉

去年の春、私はある人のところで、はじめて、その人の作ったという人形を見た。『阿波の鳴門』のお弓で、鄙ひなびた手織縞の着物など着せてあるのに、その面ざしの深い愁いが、人の心に迫るように思われた。「こうして動かすのですよ、」とそう言って、そこのおくさんは、人形の帯の下に手を入れて動かしてお見せになったが、女の人形の顔は、ただ眼が開いたり閉じたりするだけなのだけれど、どうかしたはずみに、その眼が閉じたまままで動かなくなったのである。あ、と私はそんな声を立てた。その開こうとしない眼が、生きている人の眼ざしなど遠く及ばないような、言いようのない深い気持を感じさせたからである。

私の見た人形は、その人のものとしてはそれほど出来というのでもなかったのに、思いがけないことで眼をつむったままになったりしたものだから、それでぎょっとしたのかも知れない。けれども、その眼をつむったままの人形の、あの怨みの深い面ざしは、ながい間忘れることが出来なかった。ほんとうにそう言えば、古い頃のものというと、淨瑠璃などのようなものもろくに

は知らない私のことであるから、そういう物語の中にあるお弓という女の哀れさも身にしてみては分らないのに、その人形を見ていると、何だかそのまま女の身の上の切なさが分るように思われて、まあ、こんな人形を作るといふのはどういう人なのであらうと思ったのである。

人にきくと、その人は、阿波の徳島在の和田というところに住んでいる、天狗屋こと吉岡久吉、つづめて天狗久と普通には呼ばれている、今年八十六になるお爺さんであるとのこと。つい思い立って私は、そのお爺さんに会いに行つて見たのであるが、それにしても、こういうさし迫った時代に、ただ人形のあの面ざしが忘れられないからと言って、それだけのことでわざわざ遠い四国まで人に会いに行つたりするなぞとは、わが心ながらどういふことであらうと思うのだけれど。

1

「まあ、こちらへお上りなされ。東京からおいでたお方やと思わず、うち方のお人のように思わんとお話が出来ません。私はいまから八十五年前、安政の五年に、ここから十町ほど西の、名東郡中村ごおりというところに生れました。私らの子供の時分には、こういう村方の者には姓というものはござりませなんだが、それでも士族の筋だとかいふことで、私の家は笠井とそう申しております。その笠井の岩藏と申すものの三男に生れたのでござりますが、母は三歳のときに亡のうなりま

した。父の稼業は形紺屋でござります。いまでいう染物屋で、絵もかきましたがそれは紺屋絵と言うてな、初節句のお祝いに大きな幟を立てたりしますやろ、あの五月幟の、牛若丸に弁慶が降参しとる絵やか、那須の与一の扇的の絵やか、まあそんなものを描いていたのでござります。父親の手一つで育ったのでござりますが、形紺屋と申しましたが、家に仕事場があるのではのうて、親方の家へ行つては仕事をしますので、父も兄たちも、めったに家におるといふことはござりません。全くの野育ちで、それでも、七歳のとき寺子屋に入学いたしました。八年も通うて、まあ、田舎としては、よう行つた方でござりましょう。昔のことまいかたでござりますから、庭訓往来やか、往来物ばかりの読み書きでな、いまの子供のようになしたことはちつともござりませんけんど。

いまから思いますと、私は子供のころから手さきですることが好きで、まあ、器用であつたのかいなと思います。字は下手でも絵は好き、と申しますのも、父親の稼業しやうばいを見習うたつもりなのでござりましょうが、また、紙や泥を固めたり、小さな桐の木を削つたりして人形を作るようなこともいたしました。それも、同じ寺子屋仲間の友だちに、藤本弁吉と言うのがおりました、これが天粹てんすいじゃけにな、天粹というのはどういふことかと申しますと、氣狂いのようにそれが好きといふことでござりますわ。紙をこねては人形を作つたりして、二人して向い合うては、学問をする机の下に幕を張つて、その下に屈かたうで、それで人形を廻したりしましたんじや。何と申し

ましても、徳島というところは、蜂須賀さまのお触れでな、人形芝居ただ一つで、三里四方、歌舞伎その他の興行物一切ご法度というので、もう何でも彼でも人形芝居一点張りでござりましてな、こういう在所の方まで、それは毎日のように箱廻しがやって来ておりました。箱廻しと申しますのは、箱の中に人形を六つくらい入れて、若男に娘、お母さん、子供、それに立役、ちゃりと言う風に、まあ人形の六つもあれば一通りの芝居はこなせるものとしてござります。その箱を自分でに担いで、カチカチと拍子木を叩きながら、門口から這入って来るのでござります。自分で人形も使えて、自分で語るのもあれば、中には三味線弾きのついておるのもありました、その箱廻しの真似をするというのが、どうにも面白うてならなかったのござりましょう。それはもう、寺子屋の机の下で廻したりするのでござります、お立てりと言うてな、師匠に見つかっては、半時間も一時間も机の上に立てられたいました。子供の時分から、役にも立たない阿呆げたことが好きでござりまして、家の手伝いやなんぞと言うては、裏の畑の草むしり一ついたしまして、と申ししても、その寺子屋というのが、朝から日の暮れる時分までありますし、それから家へ帰りまして、家の者は、もう大概留守でござりますしな、親爺の居らん留守々々には、また芝居をいたしました。何が足らんと申しますと、おかしなもので、小布くらのものやったら、すぐに人が持ってきてくれます。その間にはひとりで、わが襦袢を着せたり着物を着せたりして廻すのでござりますが、子供の私の拵えた、紙でこねた人形の頭でも、見に

来る人がありますのやから不思議でござります。昔のことまいたでござりますすけに、蟲眞じやと言うてな、隣りの嫁はんや娘や、近所の子供やなんぞまでが、幕やとかいろいろなものを持って来てくれたものでござります。

その時分、中村の八幡さまのお社に、阿部亀吉という人の道場がござりました。時の移りかわりで、剣術が流行はまんようになりましてからは、そこで人を集めて、漢学を教えておりましたが、私の父親が、いまで申しますと何でござりましょう、その道場の戸を締めたりあけたり、茶を湧かして出したりするような仕事をひきうけてしておったのでござりますが、父は大概ほかの仕事で手が塞がっておったもんでござりますすけに、私が十三の年に、その代りをいたしました。その仕事の合間々々に、教えられたのではうて、こっちからときどきは問うたりして、四書はみんなはよう読みませなんだけれども、大学と論語やくらいことは読めるようになりました。ほんに野育ちであつたとは申せ、まあ、これも、親のはからいであつたろうかと思ひます。」

2

「その頃、この辺りには、少しは人に知られている人形作りが三人ほどおりました。人形忠でこちゅう、大江の常三、のちに私の親方になりました富五郎の人形富。どういう訳で、この私が人形作りにな

ったのやらと思ひますけれども、十五や六の、若い、心の定まらぬ時分に、たしかに俺は人形作りになるのじやと、はっきりとわがでに思えるものでござりましょうか。この辺の田舎では、その頃には綿がえと言うてな、このさきの町の鮎喰あぐいというところにも木綿屋がたくさんにござりましたが、その木綿屋へ、讃岐の方から仕入れて来た綿を買いに行つては、わが家へ持ち戻つて、その綿をさねくりにかけては種をとり、あなたがたは都会はしよのお人やで見たこともおありなされますまいけれど、糸ひき車でぶんぶんひいてな、それから機はたにかけて木綿に織つて、それはもう、いまから思うとたいいな手間ではないのでござりますが、そうして木綿にしたものをまたもとの店へ持つて行つては綿ととり替えて、その間の利をとつて、それで暮しのたそくにしておつたものでござります。この村方にも、そんなことをしている娘や女房かみはんが、もうおおぜいおりましたが、隣りの嫁はんと言うのも、その綿がえをしておりますてな、まあ、その人が、私の顔さえ見ると、人形作りになれなれと申しておつたのでござります。

ほんとうにそう言えば、芝居もさかななことでもござりました。芝居といへば、人形芝居でこしばいのことでもござりますが、それがあなた、秋祭のときなどは、今日は和田、明日は中村と、百戸か百二十戸の村々を打つて廻りましてな。村の若い衆は、太夫をやとうて浄瑠璃の稽古をする、もう、阿波の一口浄瑠璃と言うて、男でも女でもやらんものは一人もござりませなんだ。そういう時代のことでもござりますすけになア、いまは何をいたしますにも、錢をくれんと這入りませんけんど、

昔はその仕事が好き、というだけのことで這入りました。飯食めしいと言うて、ただ、向うで飯を食わして貰うだけのことで、遊びたようなものでござりますけれど、まあ、そんなことで仕事に這入るようなものもありましてな、阿波にも、さかんな頃は人形芝居の座が三十あまりもござりました。村々にも百姓の片手間にやる座もありましたしな、立小屋ではのうて、野芝居でござりますのじゃ。箆へらをかけて、お天気ときは孤屋根こやねでな、分限者ぶんげんしゃの在所は三日もつづけて打ちました。

何しろ私は、子供の時分、いつでも、しゅうしゅう言うておりましてな、喘息やろうという話でござりました。体が弱いけに、何か坐り仕事をしたら宜かろと言うことになりまして、そんなら何が宜かろうぞと言うたら、隣りの嫁はんが言うてくれました、とうとう、父につれられて富五郎はんのところへ行くことになりました。十六の年でござりました。春であつたやら夏であつたやら、覚えもござりませんが、とにかくそういうことで、人から、なれなれと言われてそれで行く氣になったのではありますけれど、なるかと言われて、へえ、なります、と言うたのでござりますすけに、まあ、いやなことではなかったのやろうと思います。

親方というのは、口数の少い、どっちかと言うと固苦しい人でござりました。親方に仕えると言いますのは、何の仕事でもそうであらうと思ひますけれど、その仕事を覚えるよりさきに、朝晩のことを実明じつめいにせねばなりません。私も腕白ではござりましたが、家におりましたときのよう

ではのうて、朝は五時に起き、夜は十時になるまで仕事をいたしました。十時になるまで夜なべをして、夜あそびにはそれから行きました。なァに、あなた、夜遊びと申ししても、近くの小さな神さんの境内に、毎晩夜角力がござりましてな、このこッまい体で、角力が好きでおられま
せんのじゃ。へえ、五尺もありますかいな。お前のようなこッまい体でと人に笑われましたのはあ
のときでござります。

さようでござります。給金なんど、いまの錢にしたら何ぼうくらいになりました。二十錢くらいにあたりましようか。盆と正月に貰うたように思いますけんど、そのほかに何ぞと言うて親方に貰うたりはめられたりしたと言うような覚えはござりません。いまと違うて、世の中一体がそういう風でござりまして、よう根つめて仕事をすると言うことではめられるようなことがあ
ったかも知れせんけんど、ええ人形つくったからと言うてはめられたことはござりません。まあ、そう言うのが親方としての躰でもござりましようぞ。仕事に這入って三年ほども経った頃かと思ひます。よその人が見て、それでも、まあ、ええ人形つくるといふ風に見えたのでござり
ましよう、そう言うてはめてくれるお人がござりました。

この話は、よう人にも話すこととでござりますが、私の一生に、これはあかんなと思つたことが一つござります。その頃、この村の北に、田蒔豊蔵という剣術の天粹がおりました。物持ちでござりましてな、人にものを教えたりして、それでどうぞこうぞと言うのではのうて、誰でもええ、